

北野経王堂一切経（北野社一切経）の底本（三）

―高麗再雕版・思溪版以外の底本（2）―

佐々木 勇

（受理日二〇二二年十月五日）

〇、前々稿・前稿の概要

本稿の筆者は、応永十九年（一四二二）写本を主とする五〇四八帖の「北野経王堂一切経」（通称「北野社一切経」）について、前々稿と前稿において、以下のことを述べた。

1. 北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』は、高麗再雕版を底本の中心とする。（前々稿）
 2. 室町後期および江戸時代の補写経には、和刻本『大般若波羅蜜多経』を底本としたものが存する。（前稿）
 3. 元禄十四年頃の補写経には、万暦版（嘉興蔵／径山蔵）を底本とした巻も存する。（前稿）
 4. 北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』以外は、宋版一切経「思溪版」を底本の中心とする。（前々稿）
 5. 宋版一切経「開元寺版」を底本とするものもある。（前々稿・前稿）
- 『大般若波羅蜜多経』は高麗再雕版を、『大般若波羅蜜多経』以外は思溪版を底本とすることが北野社一切経書写事業当初の計画であり、和刻本・万暦版・開元寺版は、高麗再雕版および思溪版の欠を補うものでしかなかった。補写は、一行十七字で行なおうとした。

一、本稿の目的

本稿は、『大般若波羅蜜多経』以外の北野社一切経において、思溪版・開元寺版以外の底本を指摘することを目的とする。底本の認定法は、前稿と同じである。

本稿をもって、「北野経王堂一切経（北野社一切経）の底本」と題した一連の論考は、完結する。

本稿を成すにあたって、重要文化財「北野経王堂一切経」現蔵の大報恩寺（千本釈迦堂）はじめ、比較資料とした諸本御所蔵の増上寺・知恩院・醍醐寺・東寺・山石屋寺（愛知県知多郡南知多町）・瑞応寺（愛媛県新居浜市）・快友寺（山口県下関市）・海の見える杜美術館・東京大学図書館・龍谷大学図書館の公開画像を活用した。原本御所蔵の各寺院・所蔵機関御当局ならびに国際仏教学大学院大学日本古写経研究所・県・市教育委員会の皆様に、大変お世話になった。初めに、感謝申し上げたい。

二、『大般若波羅蜜多経』以外の北野社一切経における思溪版・開元寺版以外の底本

1. 東禪寺版

北野社一切経中に、東禪寺版を底本とする左の一帖が有る。これは、従来、

指摘が無い。

①505函『金剛手菩薩降伏一切部多教王經』巻上、「十七字」・「室町後」。

本帖巻末に「十一昏尾 程其」を写す。これは、東禪寺版の巻末紙数・刻工名と一致する。思溪版巻末に紙数・刻工名は見られず、開元寺版のそれは「十一尾 鄭行」である。

北野社一切経本帖には、思溪版相当帖に存する帖末音積が、無い。底本とした東禪寺版に帖末音積が無いためである。

この一卷は、文亀元年（二五〇一）に高山寺で書写された。

2. 高麗再雕版

『大般若波羅蜜多經』以外の北野社一切経の中にも、高麗再雕版を底本とした巻が有る。

①087衣函『離垢施女経』、「十四字」・応永十九年書写。

応永十九年書写奥書を有する087衣函の諸経中、『離垢施女経』のみは、一行十四字で写されている。

しかし、この『離垢施女経』にも、思溪版の千字文「衣」が書かれ、尾題に続けて帖末に「邵壽（上布巾反下奴毒反——文陀弗此云滿嚴飾女子也）溥首（上音普）斯匿（下尼力反）」で始まる音積を持つ。本経の音積は、開元寺版・東禪寺版も、思溪版とほぼ等しい。ただし、開元寺版・東禪寺版函別音積帖の音積と思溪版の本経帖末音積とは、注文・行取りに小異が有る。北野社一切経の帖末音積は、思溪版のそれに完全に一致する。

一方、高麗蔵『離垢施女経』の内題・尾題下千字文は「服」（086）であり、帖末音積は無い。

存在しない帖末音積を書写することはできない。よって、北野社一切経『離垢施女経』は一行十四字で書写されているものの、その底本は思溪版であろう、と推定される。

とはいえ、底本を確定するためには、経本文を比較するしかない。そこで、三本の経本文を対照した。その結果の一部を左に示す。

大正蔵所在	北野社一切経	高麗再雕版	思溪版
120089c29:	度以聰慧	(同上)	度以聖慧
120089c05:	首威菩薩	(同上)	辯首威菩薩
120089c06:	念諸法無蓋菩薩	(同上)	念諸法無著菩薩
120089c08:	超欲無虛迹菩薩	(同上)	超欲無虛跡菩薩
120089c11:	大目捷連	(同上)	天目捷連
120089c18:	施魔事	(同上)	於魔事
120089c28:	器物瓔珞	(同上)	器物纓絡

予想に反し、北野社一切経『離垢施女経』の本文は、高麗再雕版の本文に一致し、思溪版本文とは異なる。

また、高麗再雕版とは、次の一致点も有る。

北野社一切経『離垢施女経』本文は、一行十四字を基本とするものの、中に、一行十五字や十三字で書写された行が存する。その十五字または十三字の行は、高麗再雕版でも同じく十五字あるいは十三字で彫ってある。左に、具体例を記す（は、原本の行頭を示す）。

- 120092c12: 『際深妙故曰爲深其女報曰本際無際（十五字）』
- 120092c13: 『以是之故其二慧者爲無有慧文殊師（十五字）』
- 120093c09: 『作是言曰令其城中一切衆人犯（十三字）』
- 120093c15: 『報曰又族姓子諸法平等不可以願而（十五字）』
- 120093c21: 『假使有人來見我者悉得辯才女又報（十五字）』

さらに、北野社一切経中には、120093b18: 『就者則虚妄妄矣若不興念則無所作（十五字）』のように、高麗再雕版で十四字行の一字を二度書き、その衍字（誤写）を含めて、十五字として高麗再雕版の改行位置に合わせた行も有る。

これらから、北野社一切経『離垢施女経』本文の底本は、思溪版ではなく、高麗再雕版である、と判断される。

本帖のごとき書写がなされた理由は不明であるものの、「北野宮寺」が所持していた底本思溪版の『離垢施女経』本文に大きな欠損が存していたため、本文のみ高麗再雕版に依った、というような事情が推測される。

北野社一切経は、部分的に底本を変更する場合があることを教えられる例である。

②064畫『摩訶般若波羅蜜経』、「十七字」・応永十九年書写。

右の事例が存するならば、一行十七字で書写された帖にも、高麗再雕版を写したものが混じている可能性がある。

そこで、一行十七字の064「摩訶般若波羅蜜經」巻第一について、諸本の經本文を比較してみる。本巻は、『大般若經』に続く第六十一函「放光般若波羅蜜經」以降で、北野社一切経にも思溪版にも帖末音釈が無い帖の最初であるため、これを選ぶ。比較結果は、左のとおりであった。

大正藏所在	北野社一切経	高麗版	思溪版	開元寺版
08.0217a15:	無相無作	(同上)	無相無得	無相無得
08.0217a19:	顔色和悅	(同上)	顔色和悅	顔色和悅
08.0217b02:	大意菩薩	(同上)	天意菩薩	天意菩薩
08.0217b04:	不缺意菩薩	(同上)	不缺意菩薩	(ナシ)
08.0217b11:	擧身微笑	(同上)	擧體微笑	(同上)

以下は、省略に従う。

右のとおり、北野社一切経『摩訶般若波羅蜜經』巻第一は、一行十七字の書写であるにもかかわらず、一行十四字の高麗再雕版本文と一致する。一行十四字の高麗再雕版本文に基づき、それを思溪版と同じ一行十七字に改めて、書写している。

他にも、このような帖が存するものと思われる。

③071羽「勝天王般若波羅蜜經」巻第六、「十四字」・「江戸」。

思溪版を底本として応永十九年に書写された『勝天王般若波羅蜜經』の中、巻第六のみは、「元禄十四（辛巳）歳三月念九日」の書写であり、一行十四字で写され、帖末音釈も無い。

この巻第六を高麗再雕版と比較すると、行取りを含め、本文は完全に一致した。

ただし、北野社一切経は、高麗再雕版の巻首千字文「潜」を思溪版と同じ「羽」に改め、高麗再雕版には存しない尾題下の千字文「羽」を補っている。

この千字文の改変から、北野社一切経は、『大般若波羅蜜多經』以外では、あくまでも思溪版の欠を補うものとして高麗再雕版を用いていることが知られる。この姿勢は、本巻のごとき江戸時代の補写経に至っても、変わっていない（前稿、参照）。

④512「御製秘藏詮」巻第一・七、「十五字」・「江戸」。

『御製秘藏詮』巻第一・七とも、元禄十四年（一七〇二）「征夷大将軍源綱吉公御修復」の奥書を持つ。

『御製秘藏詮』巻第一には、「秘藏詮巻第一 第二張 車」「秘藏詮巻第一 第三張 車」などと、高麗再雕版の柱刻・千字文が書写されており、高麗再雕版を底本とすることは明確である（開元寺版・東禪寺版は、『御製秘藏詮』巻第一を531伊函に入れる）。

巻頭の千字文も、高麗再雕版の「車」を写し、後に、思溪版の「纓」に訂している。行取りも、高麗再雕版と一致し、思溪版とは異なる。

巻第七も、本文・行取りとも高麗再雕版に一致していることから、高麗再雕版を底本とすることが知られる。⁴⁾

以上、応永十九年以來元禄に至るまで、主たる底本・思溪版を補う場合に、思溪版の千字文に変更して高麗再雕版が用いられた具体例を挙げた。その場合、高麗再雕版本文を思溪版と同じ十七字に変更して書写した経（②064「摩訶般若波羅蜜經」）が存することをも指摘した。

3. 万曆版（嘉興藏／徑山藏）

白井（一九五九）は、明和元年・二年（一七六四・五）の補写に明本が用いられていることを指摘し、その明本は、「大般若經卷四百九十六以下に刊記を写している天啓年間の板本を指すものであろう。」と推定した。大般若經卷第四百九十六以下の「天啓年間の板本」は、万曆版である（前稿、参照）。

白井（一九五九）の推定のとおり、明和以降の補写経の大部分は、万曆版を底本としている。その具体例を挙げる。

①064「摩訶般若波羅蜜經」巻第一・十。「十七字」・「室町・江戸」。

『目録』は、巻第一・六「室町」、巻第二「室町、尾一紙江戸」、巻第三・四「室町、首尾江戸」、巻第五・七・八・十「江戸」、巻第九「室町、首尾江戸」と判断している。巻第一・第九には、応永十九年の書写奥書が有る。

原本を閲覧し、『目録』の書写時判断は正しいと思われる。ただし、巻第六の第十六紙までは江戸の補写である。

巻第一の本文が、一行の字数を変更して高麗版を写していることは先に述べた。

巻第二は、音釈を含め、尾二紙が江戸時代の補写である。この尾二紙の經本文は、万曆版のそれと一致する。ただし、室町時代の書写部分と同じく、一行十七字で書写されている。

また、『摩訶般若波羅蜜經』卷第二の音釈も、万暦版の音釈と一致する。本卷第二は、思溪版・磧砂版には音釈が無く、東禪寺版・開元寺版・普寧寺版とは音釈の内容が異なる。

卷第三は、末尾二紙が江戸時代の補写である。そこには、万暦版の積音が写されている。

卷第四・第六は、尾欠であり、音釈による底本判定ができない。

卷第五は、第九紙の途中まで一行十六字で写している。その後、末尾まで一行十七字となる。この卷第五本文を、底本不明巻の代表として、本文を諸本と比較した結果を後に記す。

卷第七は、江戸時代の補写になる。終始一行十七字で写す。帖末音釈は無い。卷第八末には、一字下げの「校讎」に、「第十一紙（十七行以下有八箇不減南藏智論皆作不二）」と有る。北野社一切経本の第十一紙十七行目に、「不減」の語は無い。これは、底本とした万暦版の校讎をそのまま書写したものである。

卷第九は、応永十九年の書写帖である。その巻末に貼り継がれた江戸時代の別紙に、万暦版の積音が転写されている。

卷第十は、江戸時代に万暦版を書写した帖である。巻末に、万暦版の音釈も写す。

最後に、江戸時代補写の底本が思溪版ではなく、万暦版であることを、本文の比較によって具体的に示す。参考として、開元寺版の本文も記す。

完存する江戸時代書写巻のうち、万暦版の積音が書写されていない、卷第五の経本文を比較してみる。

大正蔵所在	北野社一切経	万暦版	思溪版	開元寺版
08.0247.619	光明遍照	(同上)	光明遍照	光明遍照
08.0247.25	琉璃	(同上)	琉璃	琉璃
08.0248.02	令行	(同上)	(同上)	教令行
08.0248.08	云何菩薩	(同上)	菩薩	菩薩

以下同様である。

右の結果から、北野社一切経『摩訶般若波羅蜜經』巻第五が、万暦版を底本としたことが知られる。底本不明の巻第四・六・七も、前後の巻と同じく、万暦版を底本としたものである。

②388逸『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第一六一〜一七〇。「十七字」・「室町後江戸」。

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第一六一〜一七〇は、万暦版の校讎・音釈を写している。

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第一七〇の巻末には、「浮渡居士吳用先施贊刻此(略)萬曆丙辰歲秋七月徑山化城識」の万暦版捨銭刊記と元禄十四年の寄進書写奥書が記されており、『大日本史料』『目録』にづつに翻刻されている。

③148髪『入楞伽經』卷第五。「十七字」・「室町」。

『大日本史料』と『目録』に、「吳江居士沈瓊施贊刻此」以下の万暦版捨銭刊記の補写存在が指摘されている。この点は、大報恩寺蔵原本で確認した。原本の応永書写本は尾題で切れており、万暦版の積音と続く捨銭刊記とを江戸時代に補写し、別紙を張り継いだものである。

④458階『一切経音義』卷第一〜四。「十七字」・「江戸」。

大報恩寺蔵一切経の階函に収められた玄応『一切経音義』卷第一〜四は、元禄の補写である。

卷第三・第四の巻末に、写されている万暦版刊記を左に翻刻する。

〔卷第三〕浙江嘉興府楞嚴寺般若堂庚子年餘贊刻此／一切経音義第三卷計九千一百八十七／順治十七年八月 日徑山比丘徹微印開識

〔卷第四〕浙江嘉興府楞嚴寺般若堂庚子年餘贊刻此一切経音義第四卷計七千八百十七／該銀四両五錢七厘／順治十七年八月 日經山比丘徹微印開識

⑤117臣『大方廣佛華嚴經入不思議解脱境界普賢行願品』。「十七〜二十字」・「江戸」。

この経には、『大日本史料』『目録』に引用される、心海・龍海・宗海が記した「普賢行願品」卷闕脱之、考鮮本蔵(略)又現流明本者存四十卷本(略)更期他日得宋蔵經本檢校之而已」の明和二年奥書が有る。

これによって、明本を参観したことが、明和二年の時点でも、最終的には「宋蔵經」によって本文を確定したいと考えていたことが、知られる。

⑥379廉『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第七十一〜三、七十五〜八十、「二十字」・「江戸」。

『阿毘達磨大毘婆沙論』の思溪版は、一行十七字である。しかし、北野社一切経は、一行二十字で写されている。卷第七十五・七十六・七十七〜八十は、いずれも明和の写本であり、「〇〇切」形式の「積音」が書写されている。

そして、巻第七十八には、「第十六紙二十行（観二界若）南蔵（作苦）第十七紙十四行（若）南蔵（作苦）第十八紙一行（觀此若南蔵作苦）」の「校讞」も引用されている。

この校讞・音釈は、万暦版と全同である。

⑦069『道行般若波羅蜜經』巻第四、「十七字・「江戸」。

帖末に、「第六紙二行（如色甚深不住下南有如是色甚深不住一句）第十五紙二行（更南作便）」と「南」（蔵）との対校結果が記される。この巻末にも、一字落として、「〇〇切」の釈音が存する。当該帖が江戸の書写本であることは、本稿の筆者も、原本で確認した。同巻第七にも、同様の釈音がある。

右に例示した①⑦以外にも、現存の北野社一切経における江戸時代の補写経には、萬暦版を書写したものが比較的多い。右以外の挙例は、省略に従う。

4・鉄眼版（黄檗版）

156養函収納経は、江戸時代の補写経である。

現存するのは、『仏説無所希望経』、『如來莊嚴智慧光明入一切佛境界經』巻上、同巻下、『無量壽佛贊・觀無量壽佛經・後出阿彌陀佛偈』、『大莊嚴法門經』巻上の五帖である。

本函諸経巻末には、校訛・音釈を書写する。これらは、万暦版および鉄眼版と同一である。

そして、『觀無量壽佛經』末には、校訛・音釈に続けて、段を落として、「攝州大坂濱田氏春良同氏由春 同氏利湛／各捐貲其助刻此經 沙門鐵眼募刻」と鉄眼版刊記が写されている。よって、本経は、鉄眼版を写している。

ここから、本函他経も鉄眼版を書写した可能性が高い、と推定される。

しかし、『觀無量壽佛經』以外の本函北野社一切経は、鉄眼版が祖本とした万暦版を写した可能性も残る。

そこで、北野社一切経・鉄眼版・万暦版の本文を比較してみた。

『仏説無所希望経』の「想施奉禁戒」（大正蔵所在：1.070779c08）の「奉」字下部を北野社一切経は、「丰」に作る。これは、鉄眼版に一致する。『仏説無所希望経』に、「奉」は十四回使用され、その中、鉄眼版は、「想施奉禁戒」の箇所のみ下部を「丰」に作る。北野社一切経もこの箇所のみ「丰」で書く。このような一致は、偶然では起きない¹¹⁶。

一方、万暦版は、『仏説無所希望経』中の十四回すべてを「奉」とする。

右から、北野社一切経が、本函経典の底本を鉄眼版に求めたことは確実であ

る。

このことが判明し、具体的な書写場面を想像すると、鉄眼版を底本として、156養函現存経諸本を書写するのは容易ではないことに気づかれる。養函諸経を書写するためには、『仏説無所希望経』を鉄眼版の162慕冊から、『如來莊嚴智慧光明入一切佛境界經』巻上・同巻下は165男冊から、『無量壽佛贊・觀無量壽佛經・後出阿彌陀佛偈』は163貞冊から、『大莊嚴法門經』巻上は159毀冊から選び出して、揃えねばならない。しかも、『大莊嚴法門經』巻上は、鉄眼版一行二十字のものを、一行十七字に改めて書写している。

これらの点から、江戸時代の補写においても、応永発願時の、思溪版に基づく一切経構成と思溪版の書式とを守ろうとしていることが知られる。

5・一行十五字の底本

前々稿で、一行十五字の思溪版のままに写された左の諸巻について述べた。

111平・112章・117臣『大方廣佛華嚴經』巻第十一（十八・二十二）二十六（二十八）三十・七十二・七十六。156養『後出阿彌陀佛偈』。342奉『根本説一切有部毘奈耶陀那頌』、同『根本説一切有部毘奈耶雜事攝頌』、同

『根本説一切有部毘奈耶頌』巻上・中・下。512縷『御製佛賦』巻上下・御製詮源歌、『御製秘藏詮』巻第三（六・九・十）。

北野社一切経には、右以外に、応永の書写経でありながら、一行十五字のものがある。

○187可『大方広円覚修多羅了義経』巻上下一帖、「十五字」・「室町」。

『目録』では、北野社一切経が一帖で書写する巻上・巻下を区別せず、「十五字」とする。

しかし、一行十五字で写されているのは巻上であり、巻下は、一行十七字で書写する。この巻下が開元寺版本を写していることは、前稿に記した。

北野社一切経の本経上巻・下巻は、同筆である。しかし、巻上本文は、開元寺版本本文と一致しない。

では、北野社一切経『大方広円覚修多羅了義経』の巻上本文は、何を写したのであろうか。

まず、宋元版の調巻を確認する。

東禪寺版は、本経を上巻・下巻に分けず、二十一紙一卷とする。思溪版・積砂版・普寧寺版および高麗版も、上下巻に分けない。

開元寺版は、本経を上巻・下巻別帖とし、上巻十三紙・下巻十一紙の二帖に

調卷している。

すなわち、北野社一切経『大方広円覚修多羅了義経』のように、卷上・下に
分けて、それを一帖に仕立てた一切経は、宋元版および高麗版には存在しない。¹³⁾
それであっても、本文は、宋元版・高麗版を写したのもかもしれない。
そこで、北野社一切経『大方広円覚修多羅了義経』本文と諸版本一切経の本
文とを比較してみた。

その比較結果の一部を左に示す。

大正蔵所在	北野社一切経	思溪版・東禪 寺版・磧砂版	開元寺版	普寧寺版
170913c28:	則無有心	則無有心	(同上)	(北野社経に同じ)
170914a16:	由堅執持	猶堅執持	(同上)	(同上)
170914b04:	覺則無漸次	覺即無漸次	(同上)	(北野社経に同じ)
170914b21:	宴坐靜室	宴坐淨室	(同上)	(北野社経に同じ)
170914b21:	恒作是念	常作是念	(同上)	(同上)
170915a18:	阿僧祇不可說	不可說阿僧祇	(同上)	(北野社経に同じ)
170915a19:	猶如空花	由如空花	(同上)	(北野社経に同じ)
170915b14:	開發蒙昧	開發矇昧	(同上)	(北野社経に同じ)
170915c05:	猶迴轉火	由迴轉火	(同上)	(同上)
170916c04:	是則名爲	是即名爲	(同上)	(北野社経に同じ)
170917a22:	猶住見覺	由住見覺	(同上)	(同上)
170917b25:	供養恒沙佛	供養河沙佛	(北野社経に同じ)	(北野社経に同じ)

北野社一切経本文は、東禪寺版・開元寺版・思溪版・磧砂版・普寧寺版およ
び高麗版のいずれとも合わない。同様の比較を、高麗版とも行った。しかし、
一致しない。

普寧寺版は、右の比較諸本の中では、北野社一切経本文にもっとも近いもの
の、完全には一致しない。

残る刊本一切経は、明初の洪武南蔵(一四〇一年に正蔵部開板完了)¹⁴⁾しか
ない。

ところが、現存唯一の洪武南蔵である四川省図書館蔵本は、『洪武南蔵』
(一九九九年、四川省佛教協會)の影印では、『大方広円覚修多羅了義経』を欠
く。したがって、現時点では、洪武南蔵の『大方広円覚修多羅了義経』を閲覧

する手立てが無い。

そのため、『洪武南蔵の板本をそのまま再利用し、その千字文などを埋め木
の方法によって書き換えていた』¹⁵⁾と考えられている永楽南蔵の『大方廣圓覺修
多羅了義経』を調査した。¹⁶⁾

本文を対照すると、北野社一切経の本文は、永楽南蔵本とも小異が有る。¹⁷⁾初
めの二例のみ挙げる。

大正蔵所在	北野社一切経	永楽南蔵
170915b26:	修覺菩薩	修學菩薩
170915c05:	猶迴轉火	由迴轉火

以下は、省略する。

よって、北野社一切経『大方広円覚修多羅了義経』卷上の応永書写部分は、
刊本一切経を写したのではない。おそらく、単刊の『大方広円覚修多羅了義
経』を写したものである。

その単刊本は、一行十五字であったと考えるのが穏当であろう。

応永以前の一行十五字『大方広円覚修多羅了義経』刊本として、嘉吉元年版
が有る。京都大学附属図書館谷村文庫に、卷下が所蔵されている。¹⁸⁾残念なこと
に、卷上は残存せず、北野社一切経と本文の比較ができない。しかしながら、
卷下本文には、「右繞」「徧十」「則」「猶如」「恒沙」の諸字が使用されており、
北野社一切経本経上巻の用字に等しい。¹⁹⁾

北野社一切経『大方広円覚修多羅了義経』上巻は、底本とした思溪版対応部
分に欠損があり、嘉吉元年版の如き一行十五字の単刊本をもつて補ったもの、
と推測される。

そうして補写した『大方広円覚修多羅了義経』を、思溪版と同じく、一帖に
仕立てている。

三、結び

「北野経王堂一切経(北野社一切経)の底本」と題する本稿の目的を、「北野
経王堂一切経」応永十九年書写分の底本をより正確に確定することに定め、検
討結果を三回に分けて述べてきた。

本稿を結ぶにあたり、三回の検討結果を総括する。

応永十九年書写の「北野経王堂一切経」は、

1. 「大般若波羅蜜多経」は、高麗再雕版を底本の中心とする。
 2. 「大般若波羅蜜多経」以外は、宋版一切経「思溪版」を底本の中心とする。
 3. 「大般若波羅蜜多経」以外の経典において、開元寺版または高麗再雕版で補ったものがある。しかし、それらは、部分的な利用に留まる。
- 室町後期および江戸時代の補写経には、
4. 和刻本『大般若波羅蜜多経』を底本としたものが存する。
 5. 高麗再雕版・万暦版・鉄眼版を底本としたものも存する。
 6. 単刊『大方広円覚修多羅了義経』を底本とした可能性も有る。

なお、本稿全体の検討を通して、次のことが知られた。
 『大般若波羅蜜多経』は高麗再雕版を、『大般若波羅蜜多経』以外は思溪版を底本とすることが北野社一切経書写事業当初の計画であった。開元寺版・和刻本・万暦版等による室町後期以降の補写は、『大般若波羅蜜多経』における高麗再雕版、『大般若波羅蜜多経』以外における思溪版の欠を補うものでしかなかった。応永十九年における一切経書写の構想は、江戸時代まで引き継がれていた。

注

- (1) 佐々木勇「北野経王堂一切経（北野社一切経）の底本（一）——主たる底本——」（広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域）第68号、二〇一九年十二月。
- (2) 佐々木勇「北野経王堂一切経（北野社一切経）の底本（二）——高麗再雕版・思溪版以外の底本 1——」（広島大学広島大学院人間社会科学部研究科紀要 教育学研究）第一号、二〇二〇年十二月。
- (3) 北野社一切経には、高麗版2009203:『義要義無心無處非是學者所可（十五字）』を十四字目まで写し、十五字目「可」を段落末で十字しかない次行の頭に書写した例も有る（『義要義無心無處非是學者所（十四字）』『可言誼唯如法王及度無極（十一字）』）。なお、北野社一切経が高麗版の字体を變更する、高麗版の欠筆「弘」欠筆」を採用しない等の相違は、見られる。
- (4) 『御製秘藏詮』巻第六も、高麗再雕版の千字文「車」を写している。
- (5) 本経他巻の音釈も同様である。ただし、万暦版を覆刻した黄檗版の音釈

とも全同である。

- (6) 高麗版は、分函の千字文・訳者表記（北野社一切経「姚秦三藏法師鳩摩羅什共僧叡譯」——高麗藏「後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯」）から異なるため、比較結果の例示を省略する。

(7) なお、以下のような点でも、北野社一切経『摩訶般若波羅蜜経』は、思溪版・開元寺版・東禪寺版とは異なる。

○北野社一切経の巻第一―第九は、「摩訶般若波羅蜜経奉鉢品第二」等の品名を改行して書写している。この点は、積砂版・普寧寺版・万暦版と同じである。

しかし、思溪版・開元寺版・東禪寺版とも、品名を、一字空白で本行に追いつ込む。

○巻第八の巻首（大正藏では巻第七の途中（80288203）は、大正藏脚注「巻第八十無品第二十五首（宋）（元）、巻第八十無品第二十五之餘首（明）」とあり、宋元版と明版とで題目が異なる。北野社一切経は、万暦版と同じく、「十無品第二十五之餘」として、巻第八を開始する（ただし、大正藏の「明本」は、黄檗版大藏経（鉄眼版一切経）で代用している。快友寺藏永樂南藏では、「十無品第二十五下」である）。

(8) ただし、江戸時代補写の巻第一六七・一六九に音釈は無い。

(9) 巻第五は、明和の補写になる。

(10) 『大日本史料』四六九頁に巻第四の拾銭刊記は翻刻されている。しかし、巻第三のものは省略されている。

(11) 505高『金剛香菩薩大明成就儀軌経』巻上「明和二年乙酉六月以明本奉書写納藏了（以下略）」巻上末には、「第十葉中前側七行中所字當作於字」の万暦版巻末注を写す。同巻中・巻下「明和乙酉六月以明本書写之奉納（以下略）」、巻末および同函「佛母寶德藏般若波羅蜜経」巻下末には、「〇〇切」形式・一字下げの万暦版積音を書写する。197詩「大毘盧舍那神變加持経」巻第一「朱」「以明本遂一校了 文化十三年猛秋吉旦（以下略）」、同「蘇婆呼童子経」巻上「朱」「以明本遂校合訖 文化丙子秋七月念九日（以下略）」も有る。

その他、「大毘盧舍那神變加持経」巻第三・四・六・七、「蘇婆呼童子経」巻中下、などに「以明本」の校合奥書が見られる。

(12) このような例は、簡単には見出せない。『大莊嚴法門経』巻上も、北野社

一切経・鉄眼版・万暦版各本文の全漢字を対照した。しかし、三者全同であった。

(13) なお、北野社一切経は、『大方広円覚修多羅了義経』の本文に先立ち、巻頭に河東裴休「大方廣圓覺修多羅了義経略疏序」と終南山草堂寺沙門宗密的「圓覺経略疏序」とを書写している。思溪版・開元寺版・磧砂版は、両序が存する。しかし、東禪寺版・普寧寺版・高麗再雕版に、この両序文は無い。

(14) 野沢佳美「明代大藏経史の研究」(一九九八年、汲古書院)、同「印刷漢文大藏経の歴史―中国・高麗篇―」(二〇一五年、立正大学情報メディアセンター)、参照。

(15) 野沢佳美「明代大藏経史の研究」(一九九八年、汲古書院) 159頁8行目。

(16) 永楽南蔵御所蔵の快友寺(山口県下関市)御当局・山口県・下関市教育委員会の皆様、および調査にご協力頂いた京都国立博物館研究員上杉智英氏と新田優氏に、心より御礼申し上げます。

(17) 市一匝、礙一導の相違と、いわゆる異体関係とされる漢字の異同も存する。

(18) 1-23/タ/60貫 (<https://rmda.kuibh.kyoto-u.ac.jp/tem/rb00009370/>)。

(19) ただし、17,0918a01:「聲出於外」の「於」を「シ」セケチにし「于」とするなど、後に他本と対校した箇所が存する。

【付】大報恩寺外の北野経王堂一切経(北野社一切経)

本稿作成にあたり、調査・閲覧できた寺外北野社一切経を記す。所蔵館の次に、千字文・経名・巻数を記し、奥書が存する場合は、それも記した(ただし、元祿の補修記は省略した)。

○倭成図書館(原本調査に依る)

013辰『大般若波羅蜜多経』卷第三百三十(『倭成図書館善本目録』0453)

應永十九年(壬辰)卯月五日 本願主覺藏/執筆備中州遍照寺之衆僧有兼(三十ノ才)

075火『大宝積経』卷第二十六(同目録0845)

一校了/應永十九年卯月廿日 大願主増範/筆者 攝州崑陽寺住侶 金剛佛子 圓秀 生年二十四

233尺『顯揚聖教論』卷第八(同目録1096)

奉書寫 如法一切経内 本願主覺藏/應永十九年(壬辰)五月二十日於落陽北野經堂日本/第一雖爲惡筆且爲末代且爲書寫讀功所充付也 執

筆桑門秀海/備中総社天神宮住侶也/一校了

252力『辯中辺論』卷第一(同目録1095)

于時應永十九年(壬辰)五月七日 書寫畢/一校畢 江州 福成寺住僧 快尊金剛

283若『仏説広義法門経ほか三經同卷』(同目録0182)

一校了/于時應永十九年六月八日令書寫訖/大願主沙門覺藏/右筆攝州信盛

498封『大方広菩薩藏文殊師利根本儀軌経』卷第十二(同目録1017)

(尾欠)

498封『大方広菩薩藏文殊師利根本儀軌経』卷第十五(同目録1016)

本願主覺藏/應永十九年七月 日/校者 河州観心寺学侶 闇梨瀧尊(戒/三十一)/爲四恩法界平等分益也/攝州崑陽寺 政尊

○京都大学図書館(ホームページ公開画像に依る)

013辰『大般若波羅蜜多経』卷第二百二十三

應永十九年三月二十三日 備中州遍照寺住僧執筆有兼

013辰『大般若波羅蜜多経』卷第二百二十九

應永十九年(壬辰)卯月四日 備中州 遍照寺 住僧/筆者有兼

150大『薩遮尼乾子受記経』卷第六

北野宮一切経勸進聖 覺藏坊/平安城長北岩藏大雲寺住侶 押/應永十九(壬辰)年 五月三日 寫之

200羊『佛地経・佛垂般涅槃略説教誡経』

〈壬辰/五月/二日〉勢州金剛寺實照

202行『十二頭陀経・樹提伽経・長壽王経・法常住経』

一校了

202行『優婆夷淨行法門経』卷下

一校了

360枝『阿毘達磨界身足論』卷下

大願主覺藏/應永十九年壬辰三六月二十五日 河内國大庭庄内長福寺住/令書寫畢 筆金剛佛子良忠

406爵『阿毘達磨藏顯宗論』卷第十七

應永十九年八月 日/本願主覺藏/校者 攝州崑陽寺住 了慶/筆者

○愛媛大学図書館鈴鹿文庫（ホームページ公開画像に依る）

013辰『大般若波羅蜜多經』卷第二百二十四

備中州遍照寺衆僧執筆有兼／應永十九年（壬辰）三月二十四日於北野令書

寫畢

147身『縁生初勝分法本經』卷上

（尾欠）

147身『縁生初勝分法本經』卷下

一校畢

381顛『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第一百

文龜元年辛酉七月一日与州住本願隆圓十穀／轉讀貳度次（云々）不足書續

畢／見香 昌善 道静 道仙 祐本 神主／天文十六年（丁未）六月五日

令拜見之畢住本寺廣藏坊（生年／四十）

○京都国立博物館（原本調査に依る）

406爵『佛説一切有部顛宗論』卷第十五

應永十九年八月 日／本願主覺藏／校者 攝州崑陽寺住 了慶／筆者

（尾州） 什賢

右の外『安田文庫古経清鑑』（一九五二年、日本海外商事）に、何本かの卷

末写真が掲げられている。

The Original Text of the Buddhist Canon from Kitanokyōdō hall (北野経王堂一切経) (3)
— About the Not Main Original Text (2) —

Isamu Sasaki

Abstract: The Buddhist Canon from Kitanokyōdō hall (北野経王堂一切経) were written in 1412. The purpose of this paper is to clarify those original texts.

The following points were mentioned in the previous paper and this paper.

1. Most of the original text of Dai-Hannya-kyō (大般若経) is the Korai saichouhan (高麗再雕版).
2. There are copy's of Japanese editions in Dai-Hannya-kyō (大般若経).
3. There are also copy's of the Banreki-ban (万暦版) in Dai-Hannya-kyō (大般若経).
4. Most of the original text of besides the Dai-Hannya-kyō (大般若経) is the Song-dynasty Sixi Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経思溪版).
5. It is possible that Daihōkō-Engaku-Syutara-Ryōgi-kyō (大方広円覚修多羅了義経) was a copy of a book published independently.
6. When there was not the Song-dynasty Sixi Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経思溪版), Kaiyuan temple Edition of the Buddhist Canon (宋版一切経開元寺版) and Banreki-ban (万暦版), etc. were used secondarily.

Key words: the Buddhist Canon from Kitanokyōdō hall, the Korai Edition of the Buddhist Canon, the Song-dynasty Sixi Edition of the Buddhist Canon, the Song-dynasty Kaiyuan temple Edition of the Buddhist Canon, Banreki-ban

キーワード: 北野経王堂一切経, 高麗一切経再雕版, 宋版一切経思溪版, 宋版一切経開元寺版, 万暦版